

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	標準ドイツ語（Hochdeutsch）成立過程の特異性について
Author(s)	荻野，蔵平
Citation	Acculturation dans les epoques d'internationalisation / 国際化時代の異文化受容： 95-106
Issue date	2007
Type	Conference Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/3208
Right	

標準ドイツ語(Hochdeutsch)成立過程の特異性について

荻野 蔵平

はじめに

現代ドイツ語の言語体系を理解するためには、共時的な記述に留まることなく、通時的な分析によりその成立過程を確認することが不可欠である。例えば、語彙体系を例にとるならば、現代ドイツ語には外来語と固有語からなる類義語のペアが数多く存在する：

[1] Moment *Augenblick* (瞬間)、Adresse *Anschrift* (住所)、Projekt *Entwurf* (計画)、Dialekt *Mundart* (方言)、Autor *Verfasser* (著者)

このような語彙の二重構造はどのように生じたかという、その原因の一つとして、外来語からの影響の排除を目的とした「国語浄化運動」(Sprachpurismus)を挙げることができる。「国語浄化運動」とはそもそも外来語をドイツ語化することにより駆逐する運動であった。実際、[1]に挙げた用例も、17 世紀に設立されたドイツ初の国語協会(Sprachgesellschaften)である「実りをもたらす会」(Fruchtbringende Gesellschaft)のメンバーとしても活躍した Philipp von Zesen によるドイツ語化(イタリックで示した箇所)の試みである。しかし、そのようなドイツ語化の運動は、これらの例からも明らかなように、本来の目的を達成することは稀である。むしろ皮肉なことに、外来語を残したまま自国語による翻訳語を生み出している。つまり、上で述べた語彙の二重性を作り出すという、本来の意図とはまったく異なる予期せぬ言語変化を引き起こしている。このように現代ドイツ語の語彙選択の豊かさの源の一つは、ドイツにおいて愛国心が高揚したいくつかの時代上例ではフランス語からの借用語が氾濫した 30 年戦争後の「アラモード時代」において現れた「国語浄化運動」の結果であるといえる¹⁾。

ところで、＜共時態 通時態＞という区別は、周知のように、構造主義言語学の祖ソシュールに由来する概念である。言語学は、構造主義言語学の登場以降、共時的言語学と通時的言語学に分かれ、それはドイツ言語学においても例外ではなく、現代ドイツ語研究とドイツ語史研究とが別個に行なわれる時代が長らく続いた。しかし、この二分法は、研究者が混同を避けるべき研究視点の厳密な区別を意味するものであり、現実の言語態において両者を区別することはむしろ困難である。さらに、言語現象は、共時態からの分析だけでは不十分なことが多く、通時態からの知見を取り込むことによって初めて総合的な記述が可能になると考える。事実、近年の言語研究では、類型論、認知言語学、生成文法、文文化理論、社会言語学などの分野において顕著に見られるように、両分野間で活発な学問的交流が見られる。本論文では、1800 年前後に一応の完成を見た Hochdeutsch(標準ドイツ語)の言語的特徴のいかに多くが、「人工的・人為的」(künstlich)なものであるかを指摘し、それらが生じた語史的発展過程、社会言語学的背景を検証していく。

1. 「人工語」としてのドイツ語

近年のドイツ語史研究の特徴として、既に示唆したように、1)言語理論や共時的研究との連携の強化、2)現代ドイツ語の的確な理解のための語史研究、を挙げることができるが、さらに3)社会史・文化史といった言語を取り巻く諸領域との関連の重視、を付け加えることが可能である。つまり、語史研究が体系言語学的な記述に留まっている限り、現代ドイツ語を包括的に理解することは不可能であるとの見地から、言語と密接に関連のある文化史・社会史などからのデータも積極的に取り込もうとする姿勢である。これは、すでに H.Eggers、J.Schild などの立場をさらに推し進めたもので、言語政策史、教育史、メディア論にまで拡大していく。ここでは、そのような観点からドイツ語史研究に取り組んでいる注目すべき研究として Peter von Polenz のそれを取りあげたい。具体的には彼のこれまでの語史研究の集大成といえる『ドイツ語史 後期中世から現代まで(3巻)』(*Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart*, Walther de Gruyter/Berlin/New York, 1991-1999)を扱う(なお第1巻については2000年に第2版が出ている)。このドイツ語史は、表題からもわかるように、伝統的な語史記述とは異なり、中世後期(14世紀)、つまり初期新高ドイツ語(Frühneuhochdeutsch)の時代から筆をおこしている。それは、標準ドイツ語の直接的な出自にまで遡ることで、現代ドイツ語の様々な問題をより適切に把握しようとする意図に基づいている。その内訳は以下の通りである：第1巻：「序論・基礎概念・14世紀から16世紀」(Bd.1.: Einführung/Grundbegriffe/14. bis 16. Jahrhundert)、第2巻：「17世紀・18世紀」(Bd.2: 17. und 18. Jahrhundert)、第3巻：「19世紀・20世紀」(Bd. 3: 19. und 20. Jahrhundert)。同著者は、1985年に出版した先行研究において現代ドイツ文章語の特徴を論じているが²、今回とり上げるドイツ語史は、そのような特徴がどのようにして形成されてきたかを確認するための作業と捉えることができる。

さて Polenz は、ドイツ語の「人工性」について、「ドイツ語は、例えば英語、フランス語、オランダ語、イディッシュ語、レツツェブルク語などに比べると、極めて回りくどい(umständlich)、学者風の(akademisch)、『味気ない』(papieren)やり方で標準語化されたため、習得したり、用いたりする際や現代の言語変化について判断を下す際に難しさを感じる。ところで、それを説明するためには言語史からの論証がどうしても不可欠となるのは何に由来するのか」と問いかけ³、その原因を突き止めることがドイツ語史研究の課題であると述べている。また、別の論文では、「16世紀後半以降のドイツ語の標準語化が、フランス語や英語とは違って、話し言葉とは別個に、書き言葉に基づいて(schreibsprachlich)、あるいは話し言葉や日常語とは無縁に(sprech- und umgangssprachfern)進行した」とも述べている⁴。

このように Polenz は、標準ドイツ語の特徴を様々な形容詞を用いて描写しているが、それらをここでもう一度まとめておこう。

[2] 「回りくどい」(umständlich)、「学者風の」(akademisch)、「味気ない」(papieren)、

「比較的習得の困難な」(relativ schwer erlernbar)、「硬着した」(steif)、「抽象的な」(abstrakt)、「細事に拘泥する」(pedantisch)、「官僚的な」(bürokratisch)、「書き言葉的な」(schreibsprachlich)、「話し言葉や日常語とは無縁な」(sprech- und umgangssprachfern)

[2]に挙げた修飾的形容詞からも見て取れるように、Polenz は現代ドイツ語を「部分的に人工的な新高ドイツ語の言語体系」(ein teilweise künstliches neuhochdeutsches Sprachsystem)と規定している⁵。それでは、これらの特徴はいったいどのようにして生まれてきたのであろうか。先取りして述べるならば、それらは自然な言語変化の結果というよりも、16 世紀後半以降の標準語化の流れの中で人為的に作られたものである。だがその詳細に立ち入る前に、ここではまず「人工的」とされている言語現象としてどのようなものが想定されているのかを確認しておきたい。それは Polenz およびその他の研究者の論述に基づき概ね次のようにまとめることができる。

[3]

- a) 「枠構造・箱入り文」(Satzrahmen/Schachtelsatz)
- b) 「冠飾句」(erweitertes adjektivisches Attribut)
- c) 「継続的副文」(weiterführender Nebensatz)
- d) 「名詞文体」(Substantivierungsstil)
- e) 「造語(Wortbildung)の多用」
- f) 「定動詞省略副文」(afiniten Nebensatz)
- g) 「接尾辞純粹主義」(Suffixpurismus)
- h) 「外来の複数語尾の導入」
- i) 「名詞の大文字書き」(Großschreibung des Substantivs)
- j) 「句読法」(Interpunktion)
- k) 「二重否定(Doppelnegation)の消滅」

以下、これらの歴史的な発展をこれまでの語史研究の成果を踏まえて概観しておく。まず a) と b) はドイツ語特有の統語現象としての「枠」(Klammer)に関係し、文構造を複雑にするという共通点がある。a) は既に古高ドイツ語にその端緒が見られるドイツ語起源の現象であり、中世以降特に法律語(Rechtssprache)において発達した。しかし、極端に長い枠は、ラテン語にも影響された官房語(Kanzleisprache)において典型的に見られる文体的特徴であり、Ebert によれば 17 世紀に最も頻繁に認められるという⁶。しかし、絶対的な規範として枠の遵守は、近世以降の規範文法、学校教育の産物と考えられ、話し言葉からの自然の発達の結果とは言い難い。現に、そのような規範化が開始される以前のルター時代のドイツ語では枠の使用はより自由であり、枠と並んで「枠外し」(Ausklammerung)

も頻繁に認めれる。なお、「箱入り文」は、「複雑複合文」(Periode)とも呼ばれ、副文の中に副文が幾重にも挿入された従属構造を指す。二つの現象は例えば Kleist などの小説文体に極端な形で現れている。次に「冠飾句」という訳があてられる b) は名詞句における「粹」現象のことを指す。それは Weber によると 16 世紀後半から増加し、19 世紀に頂点に達するという⁷⁾。これも元来ドイツ語に由来するものだが、その極端な形式はラテン語における分詞(Partizip)による修飾句の拡大を模したものと考えられる。ちなみに現代作家では Thomas Mann などにも多用されている。

c) は *deshalb/weshalb* (それゆえ) などの接続詞や関係代名詞 *welches* によって導かれる副文を指す。16 世紀の人文主義時代のラテン語に強く影響を受けた文体をその源とし、従属構造が等位構造よりも高級であるとする官房語にしばしば見られる現象である。d) は Eggers や Möslin の研究によると 19 世紀後半に増加し、現代ドイツ語の顕著な特徴の一つである⁸⁾。しかし意味の凝縮化(Komprimierung)・術語化(Terminologisierung)の手段としては中世以降の法律語、行政語、学問語にも広く認められるという。e) は英語やフランス語に比べ、造語が、特に名詞の合成語が多用される傾向を指す。例えば、「言語規則」を表現しようとするれば、英語・フランス語では *rule of grammar*、*règle de grammaire* と分析的に表現するところをドイツ語では (*Regel der Sprache* と並んで) 合成により *Sprachregel* と一語で表現できる。

f) は副文において定動詞として現れた助動詞 *haben/sein* が省略されることをいう。ラテン語の模倣とされ、Admoni によれば 1700 年以降急増し、19 世紀の終わりまで確認される⁹⁾。g) の「接尾辞純粹主義」は、特に派生語において外来と自国の言語要素との混合を避けようとする現象で、この傾向は 17 世紀以降に顕著となった。例えば自国語の形容詞から名詞を派生する時には *-heit* を、外来の形容詞の場合には *-ität* を用いるといったことを指す。一方、16 世紀のドイツ語にはそのような厳密な差別化は無縁であり、*Einfachheit* のようなハイブリッドな造語も数多く存在した。しかしこれは、後になり「接尾辞純粹主義」により *Einfachheit* にとって代わられる。それはやがて「固定した 固定/固定板/固定する」を表現するのに <自国系> の *fest Festigkeit/Festiger/festigen* に対して <外来系> の *stabil Stabilität/Stabilisator/stabilisieren* といった語彙の二重構造を生み出すことになる。ところでこのような変換は、自然な言語変化というよりも、近世においてドイツ語規範化が進む中で文法家、文法学者による人為的な介入の結果と推測される。というのも、そのような変化は、語源についての専門的な知識を抜きにしては考えにくいからである。

h) は Schema(図式) Schemata, Atlas(地図) Atlanten といったドイツ語に十分統合されていない外来系の複数語尾のことをいう。これらは「インテリである」ことを誇示する「倣倣」としての役割も果たし、一般大衆にとっては「ことばの壁」(*Sprachbarriere*)ともなりうる。i) の名詞の大文字書きは、ヨーロッパでは唯一ドイツ語に見られる特徴であるが、これは 16 世紀から始まり Gottsched に至り規範化された。名詞重視、概念重視の時代思潮がその背景にあると思われる。j) であるが、句読法の中でも特に「斜線」(*Virgel*)

から「コンマ」への移行は17世紀以降に見られる。これは、句読点の機能がリズム・イントネーションの表示から、意味的・論理的構造の表示へと変化したことの反映と考えられる。最後のk)は中高ドイツ語でも頻繁に見られ、今日の話し言葉でも必ずしも無縁ではないが、やはり近世の規範化の中で、合理的な精神が働いたため消えていったものと考えられる。

以上「人工的」に形成されたと目される特徴を列挙してみたが、重要な点は、まずそれらの特徴のいくつかが現代ドイツ語体系の中心的な領域に関係するということである。例えば、a)「枠構造」、b)「冠飾句」、d)「名詞文体」、e)「造語の多用」、g)「接尾辞純粹主義」などは現代ドイツ語の典型的な特徴と見なされるものである。次に重要なのは、それらの特徴の存在そのものは、ドイツ語史を通して認められるにせよ、17世紀以降において急速に整備され、やがてHochdeutschの一部として完成されてきたという点である。それは、もちろん国民国家の成立とそれに伴う国語の整備と緊密に関連している。「現代の社会の様々な仕組みや装置は近代において作られた」というカルチュラル・スタディーズの主張が正しければ、ドイツ語の現在の有り様のかなりの部分も連続的な発展の結果というより、「国語」としての形成がなされた近代の産物と考えることができよう。

2. 標準ドイツ語成立の社会史的背景

それでは標準ドイツ語がなぜそのような特徴を帯びるに至ったかについて、文化史・社会史のみならずメディア史・教育史からの知見も取り込んだ語史研究を推し進めているPolenzに依拠しながら概観してみよう。

Polenzは、近世のドイツ語史を16世紀前半の「初期市民のドイツ語」(frühbürgerliches Deutsch)から始めている。「初期市民のドイツ語」とは、16世紀初期において先駆的に登場した「日常の実用的・公的コミュニケーションに適した平易な国語」を意味する。それは具体的には、ルターの聖書翻訳や宗教改革・農民戦争において盛んに印刷されたビラ・チラシ(Flugschrift/Flugblatt)などに萌芽的に認められる「一般に分かり易いドイツ語」のことである。例えば、ルターは「シンプルで、発音しやすく聞き取りやすい、具象的で平信徒にも分かりやすいドイツ語」をめざしたが、そのような自然で、後世のような極端な枠構造に縛られない文構造は、その時代に共通する文体的特徴であった。しかし、16世紀後半になり封建的絶対王政の時代を迎えると、ドイツ語は、1)領邦国家(Territorialstaaten)への分裂、2)市民階級の発達の遅れ、3)支配階級(王侯・貴族)の言語としてのラテン語及びフランス語の存在、といった社会・政治状況により逆にその発展が阻害されていく。いち早く国民国家を形成し、統一的な国語を発展させたフランス、イギリス、オランダ、イタリアなどと異なり、ドイツにはパリ、ロンドンのような政治的・文化的中心地が欠如していたため、その国語はある特定の地域語を基盤にすることはできなかった。そのためドイツ語は、Großbürger(大市民)とも称される「裕福な市民階級」並びに Bildungsbürger(教養市民)という国民の中でも比較的小さな集団によって育成されて

いく。それを担っていたのは、官房書記、教師、出版業者、秘書、牧師、作家、詩人、文法学者、17世紀の国語協会(Sprachgesellschaften)のメンバーなどの学識者たちであった。そのため新高ドイツ語は、書き言葉に強く依存した、極めてアカデミックな色彩の強い、形式的かつ美的な言語として形作られていく。それを Polenz は großbürgerliches Bildungsdeutsch(大市民の教養ドイツ語)と呼んでいる。つまり、今日 Hochdeutsch と呼ばれる言葉には、万人のためのコミュニケーションの手段という役割の他に、一般大衆の口語や方言とは異なるそのような洗練された標準語を必要とした中流階級あるいは教養市民階級の「自己利害」(Eigeninteresse)が濃厚に刻みこまれている。その社会言語的特徴をまとめると以下の三点になる。

まず第一に、言語文化の担い手である大市民・教養階級は、万民のコミュニケーションのための平易なドイツ語を模索するよりも、一般大衆が日常的に用いていた話し言葉・方言との差別化を図った。これは同時に、自らの社会的な威信を確保し表示する「徴候的機能」(Symptomfunktion)、すなわち教養エリートの社会的権威のシンボルとしての機能を強化することに役立った。第二に Hochdeutsch には過度の「技巧性」への強い志向性が認められる。これは、一つには、一般大衆の用いるドイツ語との間の隔たりが著しければ著しい程、自らの特権的な地位を安定させるのに有利となるためである。それはまた、ラテン語に対してコンプレックスを抱く教養市民階級が、ドイツ語の技巧上・レトリック上の貧弱さを「過剰補償」(Überkompensation)した結果でもある。これが前章で述べた枠構造、冠飾句、従属構造の多用といった現象を生みだし、標準ドイツ語を口語から乖離した極めて技巧的で人工的な言語にした原因の一つとなった。最後に、彼らは、一方で政治的な栄達を阻害されていたため、知的職業に就かざるをえず、それを補うために文学、芸術、音楽の領域において彼らの教養を発揮するしかなかった。そのため Hochdeutsch には「学問的・文学的」な色彩が著しい。ここでドイツ語は彼らの文化的自己表現の手段として機能している。

Hochdeutsch は、このように「教養(階級の)ドイツ語」(Bildungsdeutsch)としての色彩の強い標準語として成立していった。その伝統は、近代においても、ギムナジウムにおける古典語教育において受け継がれていく。しかし、その特権的な地位も 19 世紀に大衆化されたドイツ語が登場するに及び脅かされるようになる。新聞などの活字メディアの普及によって益々多くの大衆が言語文化に参画するようになったことが直接の契機だが、そのような社会状況において伝統的な標準ドイツ語が機能不全を引き起こすことはその成立の特異性から明らかであろう。学問的・文学的書き言葉としてのこの国語には、まず何よりも、社会全般に使用できるような公的な口語が欠如しており、政治的議論の有効な道具にはなじまない「本のことば」(Büchersprache)だからである。そのような事態に直面して、知識階級・上流階級は保守化し、Goethe や Schiller に代表される正統的で由緒正しいドイツ語の崩壊を危惧し危機感を募らしていく。これが 19 世紀後半に生じた「国語危機」(Sprachkrise)の背景であった。インテリたちは、大衆化されたドイツ語を「新聞

ドイツ語」(Zeitungsdeutsch)と軽蔑的に呼び、言語規範からのいかなる逸脱も「国語の墮落」(Sprachverfall)、「国語の誤用」(Sprachmißbrauch)と断罪した。そのような儀式化された言語への盲従を Mauthner は「言語フェティシズム」(Wortfetischismus)と批判している¹⁰。

3. 対照言語としてのイディッシュ語

さて、現代ドイツ語に見られる「書き言葉の要素の強い、ペダンティックな」特徴の多くが、16 世紀以降の標準語化・規範化の過程の中で形成されたとすると、そのような人為的な介入がなかったならば、今のドイツ語はどんな姿をしていたであろうか。別の言い方をすれば、前章で取り上げた言語現象は、当該のプロセスを経験していない言語(変種)には当然のことながら認められないだろう。そのような候補としてすぐに思いつくものとしては規範対象から除外される話し言葉、あるいは方言がある。Sandig によれば、話し言葉は、書き言葉と異なり統語構造がシンプルとなり、例えば次のような特徴的な言語現象が見られるという:「並列」(Parataxe)、「挿入」(Parenthese)、「取り出し」(Herausstellung)、「共有構文」(Apokoinu)、「破格構文」(Anakolut)¹¹。これらの現象は、「臨機応変性」、「自発性」(Spontaneität)という話し言葉の特徴に由来すると思われる。Sandig は、こういった特徴は規範文法では差別・排除されたが、話し言葉や方言においては歴史的に連続して存在すると述べている。

ここでは、標準ドイツ語の特異性をあぶりだすという観点から、ドイツ語の「対照言語」としてのイディッシュ語を論じた Timm の研究を取り上げてみる¹²。イディッシュ語とは、中高ドイツ語を基礎に、ヘブライ語・スラブ語などの言語要素が付け加わってできたアシュケナジ・ユダヤ人の言語である。彼らは、10 世紀から 11 世紀にかけてライン・モーゼル川地域に移り住んだが、その後、14 世紀に東欧に移住するに及び、特殊な社会環境(孤立言語文化圏、ゲットーでの隔離生活など)やドイツ語との接触が途絶えたことなどにより、彼らの言語は独自の発展を遂げていった。さて、イディッシュ語は、そのような特異な歴史を有するため、ドイツ語のような規範化のプロセスを経験していない。そのため、当然のことながら、前章で述べた「人工的」とされる言語現象の欠如が予想される。Timm によると(東)イディッシュ語には次のような特徴があるとされる。まず、ラテン語やフランス語の影響を受けていないため、従属構造が少なく、梓構造や冠飾句が存在しない(cf. [3] a)、b))。また、斜格(obliquer Kasus)の統合、属格の消失に伴う前置詞 *fun* (ドイツ語 *von* に相当)による属格の表示、形容詞の強変化・弱変化の消失、不定冠詞の語尾消失など、局用の単純化・消失が見られという。さらに動詞活用でも同じ傾向が見られ、現在人称変化における母音の一元化(ドイツ語 *er hilft*>イディッシュ語 *er helft*)、接続法 1 式や過去形の消失などが認められると述べている。これらの現象に共通するのは「簡素化」の傾向である。それはドイツ語諸方言にも当てはまるが、Timm によれば、さらにはまた(標準ドイツ語以外の)ゲルマン諸語全体に観察されるという。ということは、標準ドイツ語は

イディッシュ語、ゲルマン諸語、ドイツ語諸方言と比較してみるとかなり特異な言語変化をしてきたことがわかる。しかも、その変化は、16世紀から始まる規範化という言語外的・社会史的な背景をもっていた。標準ドイツ語というドイツ語の一変種は、文法構造に関しては極めて保守的な言語と言ってよいであろう。

4. 標準ドイツ語の発展段階

以上、標準ドイツ語成立の社会的な背景を概観したが、最後に標準ドイツ語がどのような段階を踏んで発展していったのかをいくつかのモデルに基づいてまとめておきたい。まず、議論の前提として新高ドイツ語の成立についての合意点を確認しておく。第一に、新高ドイツ語は、既に何度も指摘したように、もっぱら書き言葉のレベルで成立した。第二に、既に存在するなんらかの統一的な変種に他の変種が統合されるような形式ではなく、複数の変種がやがて一つの有力な変種に収束(Konvergenz)される形で形成されていった。本来 Hochdeutsch は、「高地ドイツ語」を表わす方言地理的な概念であったが、例えばルタードイツ語、東中部ドイツ語(Ostmitteldeutsch)、共通ドイツ語(gemein deutsch)、上部ザクセン語(Obersächsisch)などの超地域的な文章語と同一視された後、18世紀になると特定の人物・地域に限定されない、たとえばりっぱな作家や知識人が用いる「模範的で上品な書き言葉」を意味するようになった。

さて以上の前提を踏まえたうえで、新高ドイツ語成立の発展段階について考察していきたい。ここでとり上げるモデルは、Besch、Durrell ならびに Weiß の三つである。まず Besch であるが、彼は次の四段階を区別する： i) Schreibdialekt(方言的書き言葉)、ii) regionale Schreibsprache(地域的書き言葉)、iii) Schriftsprache([超地域的]書き言葉)、iv) Standardsprache(標準語)¹³。このモデルは、各発展段階の言語の存在形式を表示したものであり、標準語化の過程を書き言葉の使用範囲の拡大(方言 地域 超地域的)と規範化の進行度合いによって説明する。しかし、本論で取り上げている現代ドイツ語の特徴とされる「人工性」を明示的に説明するモデルとしては十分とはいえない。

次に Durrell は、ドイツ語と英語の標準語成立過程を四つの基準に基づいて比較検討している¹⁴。ここでいう四つの基準とは 1) Selektion der Varianten(変種の選択)、2) Kodifizierung(明文化)、3) Elaborierung der sprachlichen Funktionen(言語機能の洗練)、4) Akzeptanz durch die Sprachgemeinschaft(言語共同体による容認)である。Durrell によると、ドイツ語と英語では、1)と4)については両言語とも共通しているという。1)はある特定の変種が標準語に選択されることを、4)はその選択された変種が、一方言ではなく一言語として、あるいは国語として国内外から認められることを指す。一方、両者で相違が見られるのが2)、3)である。2)は標準語の規範がどの程度明文化(明示)されているかの程度を表わす。ドイツ語では、文法規範が Duden 文法や Duden のドイツ語辞典において常に参照され、また国語教育においても文部省によって通達の形で明示されるなど、人為的に規定されている。それに対し、英語は、規範は慣習法的な色彩が強く、ドイツ語のよう

に明文化されておらず規定の度合いも緩やかである。それは、また発音についても当てはまり、ドイツ語では Th.Siebs などの発音辞典が一つの規範の役割を果たしているのに対し、英語の「容認発音」(Received Pronunciation)は、標準発音というよりも、上流階級の上品な発音といった社会方言的なニュアンスが強いという。また、基準 3)は規範がどの言語機能にまで拡大され、洗練された形で使用されているかの目安を表わす。標準英語は、16 世紀のロンドンで用いられていた文語ならびに口語に由来する長い歴史を有するため、文語のみならず、口語にまでその領域が拡張している。それに対し、ドイツ語の標準語は、もっぱら文語のことであると考えられている。これは、標準ドイツ語がある特定の地域・階層のことばにその基盤を持たないため、必然的にネイティブ・スピーカーが存在せず、口語が「綴り字発音」という形で人為的に形成されていった事情に起因する。さらに、民族的アンデンティティの点でも、イギリスに比べ、ドイツのほうが「言語は民族であり、民族は言語である」という意識が強いため、規範意識が強くなり、国語純化運動も盛んになるという。

最後に、Weiß が提示した標準語成立の「四つの年齢期」(vier Lebensalter)についての仮説を少し詳しく取り上げてみよう¹⁵。Weiß では、Durrell において指摘された標準ドイツ語の人工性の問題がより明確に分析されているからである。ここでいう「四つの年齢期」とは次の四段階を指す。

- [4] i) sekundär gelernte Schriftsprache(二次的に学習された文語)、ii) an gesprochener Sprache orientierte, sekundär gelernte Schriftsprache(口語に準じた、二次的に学習された文語)、iii) sekundär gelernte Sprechsprache(二次的に学習された口語)、iv) primär erworbene Sprechsprache(一次的に習得された口語)

Weiß はこの区分を言語の Medialität(媒体)、つまり<話し言葉(Sprechsprache)vs.書き言葉(Schriftsprache)>、および<学習(lernen) vs.習得(erwerben)>の対立が言語のあり方に影響を及ぼすという前提のもとに設定している。まず i)と ii)の時期では、(標準ドイツ語となるべき)ドイツ語は、「第二言語」(Zweitsprache)として、つまり(学校や教会で)「学習された書き言葉(Schriftsprache)」として存在する。この言語には母語話者(Muttersprachler)は存在せず、いわば「外国語」として学習される。その一方で話し言葉としては各自の方言ないしは「お国言葉」が用いられている。Goethe や Schiller といった文豪たちは、文章語として 1800 年前後に一応完成したといわれる標準語を用いていたとしても、話し言葉としてはそれぞれの地域方言を話していたと想像される。そのためこの時期においては、後天的に学習された(またそれ故にこそ)複雑な、つまり人工的な形式(例えば冠飾句など)が特徴的である。次の ii)の時期、つまり 18 世紀の半ばぐらいになると、それは話し言葉として実際に使用されることはまだなくとも、話し言葉のイメージが反映され、観念上は話し言葉としても使用可能な形式へと移行していく。Weiß によれば、

それはちょうど Sturm und Drang の時代にあたり、前段階に比べ口語に近づく分だけ複雑な文法構造が減少してくるという。

それがやがて iii) の 19 世紀あたりになると、標準ドイツ語は「話し言葉」(Sprechsprache) としても用いられるようになる。しかし、この時期には、そのための学習がまだ必要とされる。この時期の変化をもたらした社会的な背景には、産業化や大都市化、世界大戦による人口の流動化に伴う標準ドイツ語人口の増大、ならびにラジオ(のちにはテレビ等の)マスメディアの発達による標準発音の影響力を挙げることができる。この段階でも、方言と標準ドイツ語のバイリンガル状況が続いているが、標準語は方言から影響を受けるようになり、言語形式の単純化や新しい言語形式が標準語の中にもたらされる。現代ドイツ語に見られる斜格の単純化(たとえば属格の消失)や würde による分析的な言語形式の増加は、口語や方言によって触発されたものと考えられる。最後の iv)、つまり 20 世紀に入ると、標準ドイツ語がいわば完全な母語として習得(erwerben)され、書き言葉と話し言葉の接近がさらに進行する。そしてそれに反比例して、20 世紀後半にはやがて方言が消滅していく。ここにおいて厳密な意味で初めて Hochdeutsch にネイティブ・スピーカーが生まれたといえる。新高ドイツ語に特徴的に見られる不規則性の排除、屈折の合理化・簡略化、従属構造の減少、枠構造の回避、主文語順の weil といった現象もその関連で説明できるだろう。ところで、こういった合理化は、Hotzenköcherle におけるように¹⁶⁾、これまで主として文法学者の影響、学校教育の成果によって書き言葉としての規範が浸透したという「外的」な要因による説明がされることが多かった。しかし、Weiß は、それらの現象は、クレオール(Kreol)において広範に見られる言語構造の規則化、単純化とも関連付けることが可能だとして、社会言語学的な説明の他に、言語習得のような普遍的な要因からのアプローチの有効性を指摘している。

おわりに

このように見てくると、新高ドイツ語は、もっぱら書かれるだけの第二言語として出発したため高度の技巧性と人工性を備えてきたことは確かである。しかし、発展の後半段階では、その一方で、徐々に話し言葉としても用いられるに従い、「自発性」(Spontaneität)に起因する様々な口語的な特徴を帯びるようになったきた。つまり、規則の単純化、語形変化の簡素化、分析的言語への傾向、枠外し、短文化、従属的文構造の回避などの特徴を獲得することで、一転して単純化の方向に進んできたことがわかった。ところで、標準語化が開始される前の時代のドイツ語、あるいは Polenz の言う「初期市民のドイツ語」(frühbürgerliches Deutsch)、典型的にはルター時代のドイツ語が文語と口語の乖離の少ないドイツ語であったことを想起すると、現代ドイツ語は先祖返りに例えられるような言語変化の方向性を示しているように見える。

註

- (1) 荻野蔵平「借用からみたドイツ語の特徴」東京都立大学『人文学報』354号、2004年、87-97頁。
- (2) Polenz, P. von, *Deutsche Satzsemantik*, Berlin/New York, de Gruyter, 1985.
- (3) Polenz, P. von, *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart*, Berlin/New York, Walter de Gruyter, 1991-1999/2000, Bd.1(2000), p.10.
- (4) Polenz, P. von, Sozialgeschichtliche Aspekte der neueren deutschen Sprachgeschichte, Cramer, Th. (Hg.): *Literatur und Sprache im historischen Prozeß*, Band 2: Sprache, Tübingen 1983, p.8.
- (5) Polenz, P. von, *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart*, Berlin/New York, Walter de Gruyter, 1991-1999/2000. Bd.1(2000), p.147.
- (6) Ebert, R. P., Social and Stylistic Variation in Early NHG Word Order: The Sentence Frame ('Satzrahmen'), *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* (Tübingen), 102, 1980, pp.357-398.
- (7) Weber, H., *Das erweiterte Adjektiv- und Partizialattribut im Deutschen*, München, 1971.
- (8) Eggers, H., *Deutsche Sprache im 20. Jahrhundert*. München 1973.
Möslein, K., Entwicklungen in der Syntax wissenschaftlicher Fachsprachen, *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* (Halle) 94, 1974, pp.156-198.
- (9) Admoni, W., *Zur Ausbildung der Norm der deutschen Literatursprache im Bereich des neuhochdeutschen Satzgefüges (1470-1730)*, Berlin(DDR), 1980 (= Bausteine zur Sprachgeschichte des Neuhochdeutschen 56/IV).
- (10) Mauthner, F., *Beiträge zu einer Kritik der Sprache*, 3 Bde., Frankfurt/Berlin/Wien, Ullstein, 1982.
- (11) Sandig, B., Zur historischen Kontinuität normativ diskriminierter syntaktischer Muster in spontaner Sprechsprache, *Deutsche Sprache*, 1973/3, pp.37-57.
- (12) Timm, E., Das Jiddisch als Kontrastsprache bei der Erforschung des Frühneuhochdeutschen, *Zeitschrift für germanistische Linguistik*, 14, 1986, pp.1-22.
- (13) Besch, W., Entstehung und Ausformung der neuhochdeutschen Schriftsprache/Standardsprache, Besch, W., Reichmann, O., Sonderegger, S. (Hg.), *Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung*, 2. Halbband, Berlin/New York, de Gruyter, pp.1781-1810.
- (14) Durrell, M., Standardsprache in England und Deutschland, *Zeitschrift für germanistische Linguistik*, 27, 1999, pp.285-308.
- (15) Weiß, H., Von den vier Lebensaltern einer Standardsprache. Zur Rolle von Spracherwerb und Medialität, *Zeitschrift für deutsche Sprache*, 4/05, 2005, pp.289-307.
- (16) Hotzenköcherle, R., Entwicklungsgeschichtliche Grundzüge des Neuhochdeutschen,

Wirkendes Wort, 12, 1962, pp.321-331.

[付記] 本稿は、2006 年 10 月 14 日、九州産業大学において開催された日本独文学会 2006 年秋季研究発表会シンポジウム「歴史的に見た現代ドイツ語」における口頭発表「ドイツ語はどれ位人為的な言語か」に大幅加筆したものである。

(熊本大学文学部)